

1

その事件を担当するまで、さめじま鮫島はナイジェリアという国に関して、何ひとつといってよくらい知識がなかった。

一世の中には、そういうことがある。

存在するのは知っている。あたり前にそれをうけいれている自分がいて、だが実際にそのものについて何かを考えようとすると、ほとんど予備知識がないと気づくのだ。

たとえば家庭でごくあたり前に使われている調味料がどのような製法で作られているのか、ふだん使っている家電製品がいったいどんなメカニズムで動いているか、誰かに訊かれ、説明しようとして不意に気づく。

ナイジェリアという国が、調味料や家電品ほど身近でないのは確かだが、聞いたこともない国、というわけではなかった。

この数年、新宿や六本木などで、飲食店の呼びこみをするアフリカ系の外国人が急速に増えている。彼らがアメリカ人でないことは、呼びこもうという白人に話しかけるときの英語の訛なまりや、仲間どうしの会話で用いられる、まるで聞きなれない言語から、鮫島にも想像がついた。

服装はまちまちで、街頭に立つ“仕事”のときはダークスーツを着ているが、クラブなどが

らでてくる遊び帰りには、ヒップホップ系のアフロアメリカンを意識したファッションを身にまとっている。

彼ら全員がナイジェリア人ではないだろうが、いずれにしてもはるか遠いアフリカ大陸から出稼ぎにきているのだとすれば、その数が意外に多いことに気づかされる。

呼びこみは、多くが外国人ダンサーなどが踊るストリップバーへのもので、ぼったくりを目的としたキャッチパーや個室マッサージュへのものではない。苦情が寄せられるのは、彼らの体格がいいので、「道が歩きにくい」「不意に立ち塞がられたので恐怖を感じた」といったていどのものだ。むしろ、度を超しての勧誘は注意の対象にはなるが、検挙するまでにはいたらない。管内での外国人検挙者の八割以上はアジア圏の人間で、そういう意味でも、さほど注目はされていないかった。

だが、三日前に起こった傷害事件が、鮫島に、ナイジェリアとナイジェリア人に対する興味を抱かせた。

発端は、新宿中央公園からの一一〇番通報だ。外国人どうしが喧嘩をしていて、そのうちのひとりが刃物で切られたという携帯電話からの通報だった。

新宿中央公園は、新宿警察署からは直線で六〇〇メートルほどの距離しかない。熊野神社前の交番は、ちょうど公園の西南角にある。

交番から二名の巡査が駆けつけた。時刻は午後四時十八分だった。

現場には右手を血だらけにしたアフリカ系外国人がひとりいて、巡査に気づいたアフリカ系外国人二人が走って逃走した。うちひとりが手にスポーツバッグを所持していたのを巡査が見てい

る。

通報したのは、公園で犬を散歩させていた韓国人ホステスだった。被害者のアフリカ系外国人は、出血が激しかったので救急車で病院に搬送された。そのおり、救急車の車内で、ポケットからだした大麻樹脂ニグラムを捨てようとしたのを同乗した巡査に見咎められた。

大麻取締法違反の現行犯で男は逮捕された。所持していたパスポートから、オムナリイ・オドメグという名前が判明した。取調べに対し、オドメグはかたことの英語でしか応じようとせず、たまたまその役割が鮫島に回ってきたのだった。

二〇〇三年四月、警視庁に、一九六七年の「警ら部」以来、三十六年ぶりに新しい部が設けられた。

組織犯罪対策部というのがその名称である。

刑事部から捜査四課、暴力団対策課、国際捜査課が、生活安全部からは銃器薬物対策課が、公安部から外事特別捜査隊が、さらに国際組織犯罪特別捜査隊などが編入された。

外国人犯罪、暴力団、銃器、薬物などを対象にした総勢千名近いセクションである。通称「組対」と呼ばれるこの部が、急増する外国人犯罪とそこに結びつく日本人暴力団の摘発を主眼として設けられたのは誰の目にも明らかだった。刑事犯に対する検挙率低下の最大の原因が違法滞在外国人の増加によるものであるのは否めない事実だからだ。

存在しない人間による犯罪の摘発ほど困難なことはない。

入国記録がない以上、法的には彼らは日本国内に存在しないのだ。存在しなければ、住所も氏

名も判明せず、また周辺からそれをつきとめたとしても、すべて虚偽である可能性が高い。

といて、日本国内にいるすべての外国人を犯罪者であるときめつけることはできない。正規のビザをもち、就学、就労している外国人もまた、決して少なくない。彼らひとりひとりを、「外国人であるから」という理由だけで、職務質問や身体検査の対象にしたら、日本は「人権意識の低い警察国家」であると、誤解を招きかねない。ただでさえ、言語や習慣のちがいが軋轢を生んでいる場合があるのだ。

経済活動の広域化を考えれば、鎖国のように外国人を日本から排除するのは不可能である。人、もの、金、すべてが、全世界から国境を越えて入り、またでていく循環が日本において成立しているのだ。

経済活動において、表と裏を分けへだてるのは不可能だ。犯罪は、もはや、誰もが犯罪とわかるような公然としたものだけではなくなっている。何人も気づかぬうちにそこにかかわる可能性を秘めているのだ。

組対の新設は必要に迫られてのことだった。だが寄せ集め、急造、といわれ、風通しをよくするための合併も、かえって旧来のセクシヨナリズムによる摩擦を生んだ。

それはまだ、所期の目的を十分に果たしているとはいいがたい。とはいえ、旧来のシステムではもはや首都東京の治安維持に対応できなくなりつつあるのは、数字が証明していた。

犯罪と犯罪者は常に進化する。それはある意味で当然の結果でもある。

犯罪を収入の手段として選ぶとき、犯罪者は当然、リスクを計算する。リスクとは即ち、逮捕され収監されることだ。そのリスクから逃れるために、正体をつきとめられない犯行方法を考え

だし、あるいは逮捕されても長期の服役刑を打たれないような「口実」を捜す。彼らにとって警察の存在は行為の前提となっている。そのため行為に及ぶ前から、発覚を避ける、あるいは遅らせるための方法をめぐらせる。

進化の過程において、外敵から身を守るために鎧のような皮膚をまとったり、鋭く固いクチバシを得た生物が生きのびたように、犯罪者もまた警察から逃れるために進化していく。

一方で、警察は犯罪の発生を前提にはしても、犯罪者の方法は予測しない。犯罪者が警察の捜査、追跡をあれこれと想定して方法を講じるようには、個々の犯罪に対して、発生以前から対応することはできない。

犯罪の予防に有効な手段はひとつしかない。

監視である。そのためにパトロールをこまめにおこなない、街頭防犯カメラを設置している。カメラの存在はしかし、すぐさま犯罪者に折りこまれることとなる。しかもいきすぎた監視は、市民の反発を買う。さまざまな個人情報で換金性を帯びる現在、たとえ相手が警察であっても、自分の個人情報をもたれるのを好まない人間は多い。

結局のところ、警察が未然の作業によって犯罪の発生を防ぐのはかなり困難な状況にある。

だが、犯罪の発生率を下げるのに有効な手段はある。それは検挙率を高めることだ。どんなに犯罪者が知恵を絞り、自分にたどりつくのは不可能だと信じる犯罪であろうと、人によってなされたことが人によって暴けない筈はない。粘り強く、労苦をいとわず追跡をおこなない、犯罪者に到達して検挙する。

ニワトリとクマゴのような論理だが、検挙率を高めることが結局は、リスクの高い犯罪という

収入手段を人に選ばせない結果につながるのだ。

そういう点では、鮫島は組対の新設には意味がある、と感じていた。当初こそぎくしゃくとした動きしかできないだろうが、やがては効果をもたらすときがきつとくる。

警視庁に組対部が新設されたことに対応する形で、新宿署にも組織犯罪対策課が設けられた。

マル暴担当や、薬物、銃器捜査のベテランが配されている。

鮫島が異動されなかったのは、本庁の意向だといわれていた。組対課の新設が決まったとき、鮫島は桃井に呼びだされた。

「署長に、組対課の件を相談された。君を課長にしてはどうか、といった。実は署長も同じことを考えていたようだ」

二人きりの場所で桃井は打ち明けた。鮫島はありがたい話だと思った。しかし現実はその許さないだろう。

「本庁の人事から横やりが入った。君はこのままの場所においておけ、という。本庁でも組対部が新設され、マスコミなどの注目度が高くなっている。どうやら人が注目するところに君をおきたくない人間がいるようだ」

鮫島は頷いた。

「かわらない人たちがいるんです」

そして微笑んだ。

「その方が私にとってはありがたいかもしれません。新設した以上、組対部は結果をだすことを求められます。そのために各署の組対課を集中して同一案件にあたらせることが予想されます。

そうなればこれまでのようには私もできなくなる」

桃井は小さく頷いた。

「かもしれないな。それともうひとつ、そうならなくて幸いだったかもしれないことがある。香田さんが理事官として組対に移られた」

「香田が」

鮫島は意外な気がした。香田は公安部外事一課の課長補佐として、順調に出世の階段を登っていた筈だった。組対部には確かに公安部からも人員が投入されているが、香田がそれに含まれるのは、やや流れがちがうような気がする。

「雀の噂では、香田さん本人の希望があったということだ。別に公安部に愛想をつかしたわけではないだろうが、あの人なりにやってみたい仕事があるのだろう」

鮫島は無言だった。

「いずれにしても、現場で顔を合わせる機会が増えるかもしれない。前もって知っておいた方がいいと思っただけ」

「ありがとうございます」

鮫島の予測通り、新宿署に新設された組対課は、入国管理局の新宿出張所などと連携して、アジア系外国人の違法滞在者摘発、さらに違法風俗店摘発に忙殺されていた。管内にはアジア系外国人が働く、飲食店、エステ、マッサージ店が多数あり、それらをこれまでとはちがった厳密な調査の対象とするだけで、捜査員は寝食の時間も奪われるほどだった。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。